日本放射線腫瘍学会第30回学術大会

企画・制作　朝日新聞社メディアビジネス局　広告特集

がん治療　幅広く実践的に学んだ3日間

うめきたキャンサーフォーラム～放射線治療ってなんなん？～

2人に1人がんにかかる時代。しかし医療の進歩により、がんは克服できる、あるいは長くつきあっていく慢性的な病へと変わりつつあります。昨年11月17日～19日に開催された「日本放射線腫瘍学会（JASTRO）第30回学術大会（大会長:大阪国際がんセンター放射線腫瘍科主任部長　手島昭樹）」を記念し、広く一般にがん治療の知識を知ってもらうために行われた「うめきたキャンサーフォーラム」。放射線治療をはじめとするがん治療の最前線、ケアの視点からとらえるがんとのつきあい方など、様々な角度からせまる講座、講演、講習会が行われました。

開催リポート

11月17日　市民公開講座

パネルディスカッションでは、がん治療経験を持つ麻木久仁子さん、天野慎介さんのお話に加え、西村恭昌先生（近畿大学教授）、一上由華さん（市立豊中病院）が医師、看護師の視点から話題を展開。講演では、大阪府のがん対策の取り組みについて、また大阪の最先端のがん治療施設について紹介されました。

がんになっても いきいきと暮らせる社会へ

「がん治療と私　～それぞれの視点から～」をテーマに、八木早希さん司会で行われた第1部のパネルディスカッション。2012年に初期の乳がんと診断され手術を受けた麻木さんは「健康には自信があっただけに、がんと診断されたときは驚きましたね」と偽らざる心境を。27歳で悪性リンパ腫に罹患した天野さんは「当時、がんになっても会社で働き続ける人が周囲にいませんでした。治療の見通しも立たず、自ら退職してしまいましたが、がんと診断されたら、まずは軽々しく仕事を辞めてはいけないことを、みなさんに伝えたいです」と振り返ります。それを受け一上さんは、がんになっても働き続けられる様々なサポートを紹介。「高額療養費制度や傷病手当金などで治療費負担は抑えられますし、病院によっては、がん患者の様々な相談に応じるソーシャルワーカーがいます。がんと向き合う際には、ぜひ活用してください」とメッセージを送ります。西村先生は「部位ごとに差はありますが、早期発見できればがんは根治できる時代。事実、がんの5年相対生存率は年々向上を遂げています」と話し、「がんを治療しながら仕事を続ける人も増えていくでしょう。働きながら通院して受けられる『放射線治療』はその際、大きな役割を果たします」と、放射線治療の期間や費用、放射線で治療できるがんについての紹介がありました。

がんになっても安心して暮らせる社会を目指す「全国がん患者団体連合会」の理事長も務める天野さんは「医師と相談し、治療の見通しやスケジュールを立てて。様々な制度も利用し、がんになっても働き続けてほしいです」と訴えました。

司会進行はフリーアナウンサーの八木早希さん

がん患者の立場から　麻木久仁子さん（左）と天野慎介さん

「がん告知された人への言葉の選び方は？」など、会場からの質問に答えるパネリスト

3施設から医師が登壇　進化するがん治療の中心的な役割が期待される

期待が高まる 最新の治療施設

第2部講演では、がん治療最前線の現状が幅広く紹介されました。大阪府健康づくり課長の田中修さんから、大阪府のがん対策の取り組みが紹介された後、大阪府内における最先端のがん治療施設から3医師が登壇しました。

松浦成昭先生（大阪国際がんセンター総長）は、同センターで行われる医療内容をもとに、最先端のがん診断、がん治療、将来の見通しについて。溝江純悦先生（大阪重粒子線センター長）からは大阪重粒子線センター（治療開始は10月予定）の特徴や、今話題となっている「重粒子線」を用いた治療の説明が。黒岩敏彦先生（関西BNCT医療センター長）からは、従来のがん治療とは全く異なる機序のホウ素中性子捕捉療法（BNCT）について、また現在所属する大阪医科大学で3月竣工予定のBNCT治療施設の紹介がありました。

大阪重粒子線センターについて、溝江純悦先生からの講演

11月18日　特別講演と音楽の集い

午前の部は、中川恵一先生（東京大学准教授）と鈴木修先生（大阪大学寄附講座准教授）が「大人のためのがん教育」について講演。手術、抗がん剤と並び、がん治療の3本柱の一つである「放射線治療」に重点を置いた話題が展開されました。特に、放射線治療の新たな可能性を開く「重粒子線治療」の話題は、参加者の関心を集めていました。

午後の部は、JASTROオーケストラ（日本放射線腫瘍学会員を中心とした音楽愛好家有志で結成）の演奏会。オーケストラの生演奏をバックにした参加者全員の合唱や楽器紹介など、音楽に親しんでもらおうという思いにあふれたひとときになりました。イングリッシュハンドベル「ベルリンガーズLene」によるコンサートも開催。リズミカルで力強い音や優しく響く音、豊かなハンドベルの音色が、会場中に響き渡りました。

中川先生の講演テーマは「がんってどんなん？」

鈴木先生の講演は「放射線治療ってなんなん？」がテーマ

楽器紹介で、オーケストラがより身近に

ハンドベル「上を向いて歩こう」など計9曲を披露

11月19日　プロ直伝 「がんと上手につきあう方法 ～栄養管理と痛みのケア～」

看護師、理学療法士、言語聴覚士、臨床心理士、管理栄養士、歯科衛生士、リンパ浮腫セラピスト。大阪国際がんセンターで活躍するメディカルスタッフが、がんとつきあう上で欠かせない「栄養管理」と「痛み」のケアについて講習会を開きました。どのブースも、講演者と受講者の距離が近く、受講者からの疑問を盛り込む形で活発な講習が行われました。心理ケアのブースでは、臨床心理士が「気持ちのつらさをため込まず、周りの人に相談しましょう」と呼び掛けたり、皮膚ケアのブースでは「日ごろから、体を洗ったら30分以内に保湿剤を塗りましょう」と実践的なメッセージを送ったり。専門家がそれぞれの立場から、直接的な治療以外にできる様々なケアの必要性を訴えました。がんサバイバーやその家族など、参加者はみな熱心に聞き入っていました。

「保湿は肌を守るためのベールです！」皮膚ケアブースから

「お口の環境を整えてがん治療を乗り切りましょう！」口腔（こうくう）ケアブースから

ケア関連の様々な展示も充実していた

主催：日本放射線腫瘍学会第30回学術大会　共催：多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)」養成プラン『ゲノム世代高度がん専門医療人の養成』
後援：朝日新聞社メディアビジネス局、公益財団法人日本対がん協会　協賛：日本アキュレイ株式会社、株式会社バリアン メディカル システムズ、メンリッケヘルスケア株式会社、株式会社スヴェンソン、株式会社JTB西日本　協力：プレストケア京都株式会社、テルモ・ビーエスエヌ株式会社、サンスター株式会社

今年度の日本放射線腫瘍学会第31回学術大会での市民公開講座は、10月12日（金）・13日（土）に国立京都国際会館で行われます。